

平成 29 年 1 月 5 日

京口門だより No. 39

新しい年を迎えました。今年もどうぞよろしくお願いたします。「年頭の海見て立てむ志」(大橋敦子)

前回のたよりではコレステロールや中性脂肪の身体での役割について話しました。ことにコレステロールはわれわれの身体の中で大切な働きをしているということでした。このようなコレステロールが血液の中で増えるとどういうことになるのか大変気になるところです。

実は高コレステロール血症の善悪については、医学の学会でも相反する意見があり問題になっています。日本動脈硬化学会の専門家はコレステロールが高くなると心臓や脳の動脈硬化を増悪させ、心筋梗塞や脳卒中を起こしやすくなるとして、コレステロールを下げる治療を進めようとしています。一方、日本脂質栄養学会の専門家はコレステロールは決して悪者ではなく、コレステロールを下げたところで心筋梗塞や脳卒中の発症とは関わりがないし、高い方がむしろ死亡率が少なくなるというデータを示しています。コレステロールの高いことと実際の血管の動脈硬化の状態とはあまり関係ないと言われていました。

生まれながらにしてコレステロールの高い家族性コレステロール血症の人たちがいますが、むしろ感染症に強く、うつ病にもかかりにくく、決して早死にすることもないという調査結果もあるようです。

また、女性はコレステロールが高くても、動脈硬化による病気とはあまり関係なく、とくに年配になってコレステロールを下げる薬を飲む必要性がないとも言われています。

こうしてみると、コレステロールが高いことが絶対的に悪いという考えに疑問がでてきます。欧米でも強力なコレステロール低下療法に疑問がだされているようです。だが、一方でコレステロールを下げることを強力にすすめる専門家もいます。どちらの考えに従ったらよいのか困った問題ですが、あまりコレステロールを下げることにがむしやらにならなくても良いのではないかと思います。

最近では総コレステロール値よりも、悪玉コレステロール(LDL コレステロール)が高く、善玉コレステロール(HDL コレステロール)の低いのが良くないとされますが、この科学的根拠にも疑問が出されています。

